

組織的な大学院教育改革推進プログラム 平成19年度採択プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称 : 臨床の知を創出する質的に高度な人材養成
(京大型臨床の知創出プログラム)

機 関 名 : 京都大学

主たる研究科・専攻等 : 教育学研究科臨床教育学専攻

取 組 代 表 者 名 : 桑原 知子

キ ー ワ ー ド : 臨床の知の創出、主体的能力の育成、現代的意義をもつ教育

I. 研究科・専攻の概要・目的

○教育学研究科の概要・目的

【教育学研究科の教育目的】

本研究科は、教育と人間にかかわる多様な事象を対象とした諸科学を考究することで、理論と実践とを結びつけた心・人間・社会についての専門的に高度な識見ならびに卓越した研究能力を養成し、さらに、広い視野と異質なものへの理解、多面的・総合的な思考力と批判的判断力を形成し、人間らしさを擁護し促進する態度を啓培することで、地球社会の調和ある共存に貢献できる高度な専門能力を持つ人材の育成を目的とする。

【教育学研究科のカリキュラムポリシー】

多様かつ調和のとれた教育体系のもと、学生の自発的な研究活動を支援し、理論と実践とを融合し、学際的・国際的なフィールド経験を重視した教育を実現することで、本研究科の教育目的を達成する。

【教育学研究科（修士課程）のディプロマ・ポリシー】

1. 本研究科の教育目的に沿って設定された授業科目を履修し、基準となる単位数を修得することが、修士の学位授与の必要要件である。修得すべき授業科目の中には、講義のみならず、演習、実習、実験、フィールドワークそして修士論文作成等が含まれる。

2. 本研究科の教育目的で明示されている、理論と実践とを結びつけた心・人間・社会についての専門的に高度な識見ならびに卓越した研究能力、広い視野と異質なものへの理解、多面的・総合的な思考力と批判的判断力、人間らしさを擁護し促進する態度、が研究成果として実現されているかどうか、さらにはその結果として地球社会の調和ある共存に貢献できる人材となっているかどうか、課程修了の具体的な目安となる。

【教育学研究科（博士後期課程）のディプロマ・ポリシー】

理論と実践とを結びつけた心・人間・社会についての専門的に高度な識見ならびに卓越性と独創性を発揮しうる研究能力、広い視野と異質なものへの理解、多面的・総合的な思考力と批判的判断力、人間らしさを擁護し促進する態度、が研究成果として実現されているかどうか、さらにはその成果として地球社会の調和ある共存に貢献できる人材となっているかどうか、課程修了の具体的な目安となる。

専門的能力を担保するために、自主的な課題研究とその成果を学位論文等の形でまとめ、客観的な評価を受けることが必要である

○臨床教育学専攻の概要・目的

【臨床教育学講座】

臨床教育学講座は、既設の二つの小講座（教育人間学講座と臨床教育学講座）を統合するかたちで1998年に再編成された、我が国では数少ない名称の講座である。わたしたちは、その名乗りにふさわしい新しい教育研究スタイルの創造を目指して、理論的臨床的な課題に取り組んでいる。また、本講座は、研究者の養成と並行して、在職社会人（2種院生）の再教育の分野でも工夫を重ねてき

ている。

【心理臨床学講座】

複雑さを増す現代社会において、さまざまな問題や悩みをもつ人も増えてきて、そのような人々が心理療法を求めることも多くなっている。ここでは心理的な見立てや心理療法を実施するための教育・訓練が様々な実習も含めて、基礎から行われている。それと同時に、様々な心理的問題の背景を考え、心理療法の技法を発展させるための実証的・理論的な研究を行っている。

【臨床実践指導学講座】

臨床実践指導学講座は、2004年に日本で初めて設置された臨床実践指導者養成コース（博士後期課程）である。ここでは心理臨床学・臨床心理実践学講座と連係して、臨床実践に関する実践指導法や事例検討の在り方、スーパーヴィジョンに関する実践と教育に取り組んでいる。そこから臨床実践体験に根ざした実証的・理論的な研究を行なっている。

【臨床心理実践学講座】

心理教育相談室における相談活動を基礎として臨床経験全般を高め、相談能力をつけるとともに、臨床実践に関する研究を行ない、教育現場等とも連携して臨床実践と研究の一体化を図る。また、臨床現場に出かけて相談を必要とする人たちの心の健康の増進を目指すとともに、現場に役立つ研究を行い、教師や臨床心理士のリカレント教育、臨床心理士を育成するためのスタッフ（教員やスーパーバイザー）の養成を行う。

II. 教育プログラムの概要と特色

上記のような質的に高度な人材養成のためには、講義・演習形式による教育だけでは十分ではなく、院生が優れたモデルと出会うことで質的に高度な能力とは何かを体得・理解し、院生自身が具体的な現場のなかで自ら考察し実践する機会をもち、さらに複雑な事象を自ら問題として確定させ解決する経験をもって、実践的かつ学問的な「臨床の知」を創出する能力を身に付けることが必要である。以上のような理由から、本専攻のこれまでの実績と「魅力ある大学院教育」イニシアティブでの経験と成果をふまえ、次のような教育プログラムを構築する。（なお外国語教育についても、イニシアティブの経験をふまえ、さらに科目を新設し充実させる。）

④**臨床の知プログラム**：以下の3つのプログラムを有機的に統合し、フィールドでの実践経験と心理学・教育学ならびに人間諸科学の理論とを、個々の院生が「臨床の知」として統合し発展させていくプログラムである。ここでは他のプログラムで習得した院生一人一人の技能や知識に配慮しつつ、その経験が「臨床の知」を創出する質的に高度な研究能力へと統合されることを目指す。[「京大型臨床論」など：概念図④参照]

⑤**トップランナープログラム**：これは本学教員を中心として心理臨床・教育そして人間に関わる他分野における優れた専門家・実践家との交流プログラムである。ワークショップへの参加から実習・演習・見学まで様々な形態があるが、この交流は院生にとって「臨床の知」を創出する質的に高度な能力とはどのようなものであるかを知る機会となる。[「心理臨床学特論」など：概念図⑤参照]

⑥**フィールド・実践プログラム**：本専攻が指定するフィールドに院生が参加し、現場で自ら実践する教育プログラムである。実践的な知とは何かを、相談室・学校・病院・地域など具体的なフィールドでの実践を通して学び、それをもとにスーパーヴィジョンを受ける。[「心理教育相談室相談実習」など：概念図⑥参照]

⑦**ボトムアッププログラム**：これは具体的なフィールドにおける問題発見と独創的取り組みの能力を開発するために、院生グループの自発的な研究プロジェクト構築を支援するプログラムである。具体的なフィールドを院生自らが発見し、そのなかで自ら知を創出する経験をもつことを目指す。

〔「研究開発コロキウム」：概念図⑩参照〕

このようにして、4つのプログラムを組み合わせることで「臨床の知」を創出し、院生の実践的な技量を高度化すると同時に研究能力を高度化し、学位論文作成までの教育プログラムを実質化する。

臨床の知を創出する質的に高度な人材養成

— 京大型臨床の知創出プログラム —

フィールドへ

海外の大学・研究所・
学校現場など

学校 福祉機関

病院 家庭裁判所

心理教育相談室

生涯教育機関

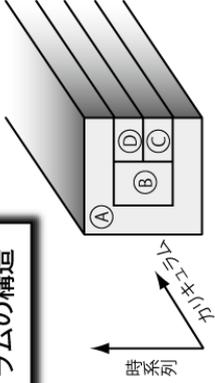
研究者養成

- ・ 高度な研究能力
- ・ リーダーシップ
- ・ 国際的活躍

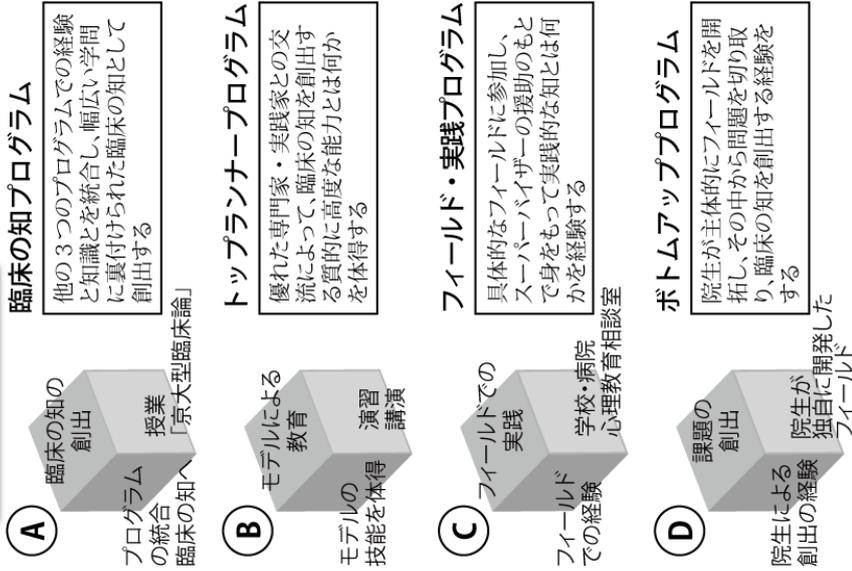
実践者養成

- ・ クライアントとのコラボレート能力
- ・ 全体を捉え、自律的に対応する力
- ・ 臨床の場を作り、維持する力

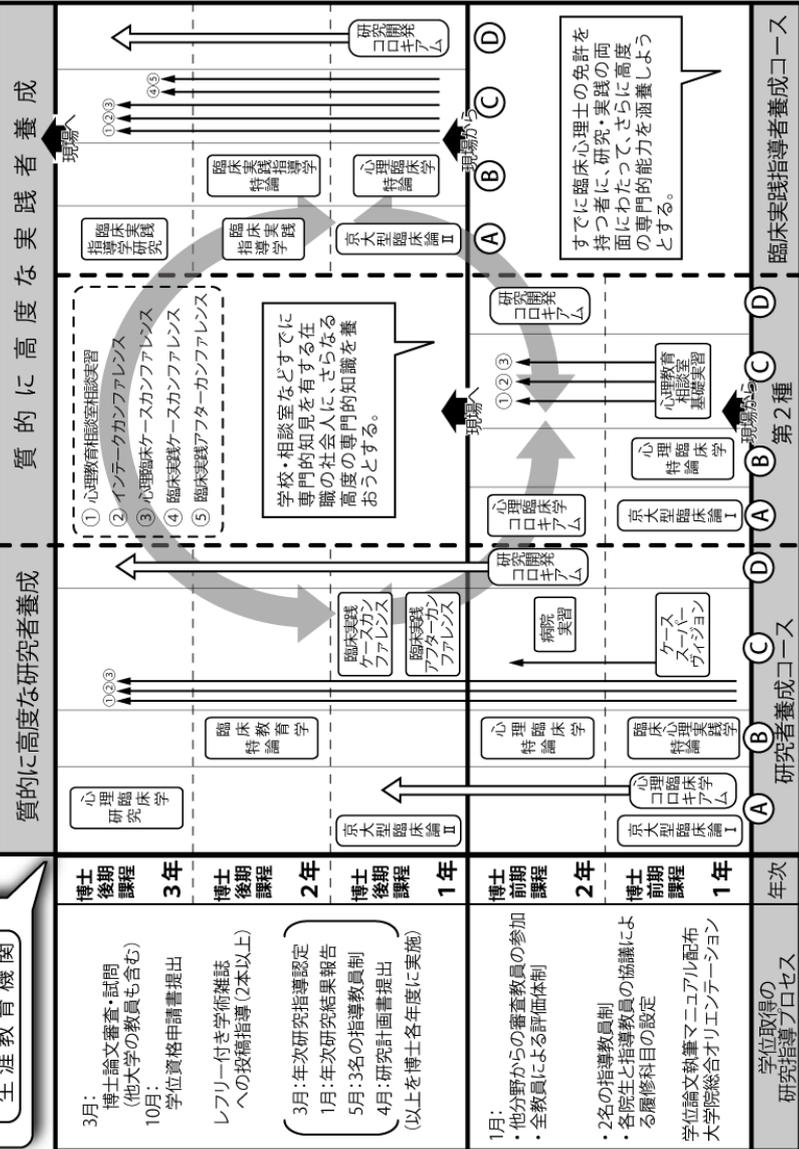
プログラムの構造



プログラムの概要



「臨床の知」の創出



※ 外国語での教育は、外国人客員教授などによる講義、論文作成・発表に関する授業に加え、国際教育研究フロンティアという科目の新設など充実させる。

Ⅲ. 教育プログラムの実施結果

1. 教育プログラムの実施による大学院教育の改善・充実について

(1) 教育プログラムの実施計画が着実に実施され、大学院教育の改善・充実に貢献したか

○本プログラムが解決を目指した課題

人材を要請する社会はたえず変化し複雑化しており、「有用な人材」とは固定的な能力をもつ者のことではない。また心理臨床や教育という領域は、生きた人間と向かい合い「関係性」を生きることであるため、その関係性において自身が「有用な人材」とは何かをたえず問い続ける必要がある。そこで本教育プログラムは、このような現代社会のなかで、自ら問題をみつけ柔軟に対応し、創造的な解決を目指すようなメタレベルの能力、「臨床の知」を創出することのできる質的に高度な人材の養成を目指そうとするものである。このように本教育プログラムは、本研究科の目的にいう「実践と研究の密接な連携」とはどのように実現され、「有用な人材」とはどのような人材を指すのか、また「学界並びに社会に貢献する」とはどのような教育を必要とし、どのような人材を養成するのかという点をさらに明確にして、従来の教育の課程を具体化・実質化することによって、より現代的意義をもった人材を養成しようとするものである。以下、国際関係・アウトリーチ・カリキュラムという三つの枠組みに従って、当初計画への具体的な取り組み状況を明らかにする。

○当初計画への具体的な取組状況

・国際関係

1) 3年間の主な取り組み

国際企画での主な取り組みは、海外のフィールドでの活動であった。その活動内容は、大学院生が主体となって行われた国際会議、セミナー、学術シンポジウム、外国人客員・非常勤講師の招聘など多岐にわたる。具体的には、Joslin Diabetes Center (ボストン) での糖尿病心理臨床 (平成 19~21 年度)、Harvard University Health Services, Austen Riggs Center, Cambridge Health Alliance (ボストン) での心理臨床スーパーヴィジョンに関する研修 (平成 19 年度)、Dr. Wolfgang Giegerich による夢分析セミナー (ミュンヘン/ベルリン) および International School of Analytical Psychology (チューリッヒ) でのシンポジウム (平成 19~21 年度)、ベルリン自由大学との共同研究になる「学習文化」や「幸福感」をテーマとしたワークショップや調査 (ベルリン/日本) (平成 19~21 年度)、ロンドン大学教育研究所での国際会議やシンポジウム・学術交流とイギリス教育哲学会への参加 (ロンドン/日本) (平成 19~21 年度)、メディア教育に関するシンポジウム企画 (ソウル) (平成 20 年度) などであり、それぞれの領域で活発な国際交流に取り組んできた。

2) 「大学院教育の改善・充実」に対する貢献

大学院教育改革支援プログラムを受け、この「国際企画」では質的に高度な人材育成のために、海外での研究活動を行うことのできる教育プログラムを作成する努力を行ってきた。この国際交流プログラムを通して、大学院生たちは実際に海外に出て国際会議や国際シンポジウムに参加し、英語による発表を行ってきた。さらに海外の一線で活躍している外国人講師を招聘して、学術シンポジウムやワークショップ・セミナーを開催し、優れたモデルとなる人材と実際に交流することによって自らの研鑽を積んでいる。これは日頃受けている講義や演習形式ではない、直接的な体験を重視する教育スタイルであった。こうした体験を新鮮なものとして受け止めたことが、院生からの報告として公表した。そして何と云っても日本国内ではなく、海外での研究・研修を行えたことは、今後の研究や教育を考えた上で大きな刺激となることが期待される。また、どの企画も日本語という母国語ではなく、外国語ですべての発表や討議が行われていることが、もっとも貴重な体験として将来に生きて行くであろう。「臨床の知」に関わる研究や教育について国際的に活動するためには、何をおいても外国語を駆使して、自らの主張を的確に表現しなければならない。それらの活動を今後行うためにも、大学院生時代にこのようなプログラムを通して経験を積んだことは、大学院生一人一人が「臨床の知」を考え、創造することに充分貢献できたと考えられる。

このように、主体的かつ国際的な大学院生を養成するという、本プログラムのめざした大学

院教育の課題達成に関して、かなりの効果をあげることができたと結論づけられるであろう。



写真 1・写真 2 ロンドン大学教育研究所・京都大学大学院教育学研究科 第二回国際シンポジウム（平成 20 年度）

・アウトリーチ

1) 三年間の主な取り組み

アウトリーチの主な活動としては、講演会・シンポジウム等の開催、大学院生の国際発信能力の育成、大学院生の実践活動の支援、相談室アーカイブの作成などがある。講演会講師としては、松木邦裕先生／内藤朝雄先生／鶴田英也先生／渡辺あさよ先生（以上平成 19 年度）／ヒルマン先生／リエ先生／中沢新一先生／ジェイコブソン先生／ミュラー先生／ブル先生／川崎克哲先生／名護博先生（以上平成 20 年度）／シュピーゲルマン先生／マイン先生／ケースメント先生／ブルツェ先生（以上平成 21 年度）をお招きした。

国際発信能力の育成に関しては、英文校閲支援・学会発表支援など、国際発信能力を高める事業が活発に実施された。実践活動の支援としては、京大心理教育相談室「京都大学大学院教育学研究科臨床心理事例紀要」原稿および大学院生の事例研究論文に対するコメント・スーパーヴィジョン支援が行われ、心理臨床領域の学生の心理臨床実践に対して手厚い支援がなされた。さらに、これまでの「心理教育相談室」の活動の数値的・質的な振り返り及び座談会が実施され、「京都大学大学院教育学研究科臨床心理事例紀要」第 36 号に「相談室アーカイブ」として原稿が執筆された。

2) 「大学院教育の改善・充実」に対する貢献

3 年間にわたって、講演会や大学院生の研究支援において、充実した企画を実行することができた。講演会では国内外の専門家をお招きし、一流の研究者である「トップランナー」の語りのなかから、「臨床の知」を大学院生が体感するよい機会になった。いずれも興味深い講演であり、多数の参加者があった。講演会の多くは国際交流の成果として企画されたものであり、国際交流が単発的なものに終わらず日本においても根付く形で実現されたことは意義があったと言える。また、学会発表支援や英文校閲支援にも力を入れ、結果として、国際学会における大学院生の学会発表件数が増加したことはたいへん意義深いと思われる。また、大学院生の日々の研究や心理臨床実践を側面から支える企画も、実質的な意味での「臨床の知」の習得に寄与したと考えられる。最終年度においては、これらの成果を「相談室アーカイブ」や、単行本の発行として結実させることができたことも成果としてあげられよう。

一般に、海外でのセミナーや大規模なシンポジウムは、それが単発的なものにならず真に意味深いものとなるためには、その後の継続的な取り組みや、個人に対する細やかな支援を必要とする。アウトリーチにおけるさまざまな取り組みは、このような、継続的・個人的な支援を行うものであり、大学院生が実質的な知を身につけるために貢献したと考えられる。



写真3 一泊臨床研究会（平成19年度）



写真4 新ユング研究所・国際シンポジウム（平成19年度）

・カリキュラム

1) 3年間の主な取り組み

本カリキュラムにおける取り組みの中心となったのは「研究開発コロキウム」であった。これは、大学院生が主体的に研究テーマを開発・設定し、研究経費の支援を得ながら、そのテーマを授業として展開するというもので、学部生・大学院生の受講登録、授業参加、単位取得等、通常教員が行う授業と同じスタイルで行われてきた。また、研究成果を学会等に発表するなど、得られた成果の還元も積極的に行われてきた。

採択数では、平成19年度は9件、平成20年度は8件、平成21年度は7件であった。それぞれの「研究開発コロキウム」は、年度終了時に報告書の提出が義務づけられ、報告書として冊子体にまとめられた。また、委員会としては、報告書によりどのような取り組みが具体的に成されたのかを確認・精査し、次年度の採択資料としても活用した。

次項に述べるが、ほとんどすべての「研究開発コロキウム」が単年度で終了する内容ではなく、3年間を通して共通のテーマとして取り組む必要性が認められた。また、3年を終了した以降も継続して研究していくテーマがほとんどであった。

2) 「大学院教育の改善・充実」に対する貢献

さまざまな人間の営みの領域に関わり、そこから人間が存在全体として生きる上での知に触れ、それを咀嚼し、他者に伝えることのできるものにしていく努力が、3年間、積み重ねられてきた。そこには、「臨床の知」は、多種多様な領域における人間の営みに関わり、そこから従来の近代自然科学的な方法論とは異なる方法によって見出されるのではないかという発想が根底にあったとすることができる。この点で、本プログラムにおける取り組みは、「臨床の知の創出」に対して一定の方向づけを成したとすることができるであろう。

近年、少子高齢化に伴ってライフスタイルの大きな転換が模索されているが、「研究開発コロキウム」もそうした社会の動向を鋭敏に反映し、「老い」「糖尿病（慢性疾患）」「遺伝カウンセリング」など、これまで十分に関わることのなかった領域を照射している。このことは、「臨床の知」が生きる人間にとって必要なものであるという観点に立つとき、きわめて重要な貢献を成したと言えるであろう。

こうした「臨床の知」を創出する人材を育成するうえで、大学院生の主体的学びを保証し、その機会を与えることは急務であった。本プログラムにおける「研究開発コロキウム」は、それを実現したものであり、たいへんユニークな教育スタイルであると言える。（これについては、外部評価においても高い評価を受けた。）「既存の問題に適応することのできる能力だけではなく、錯綜した諸事象のなかから問題を問題として確定し、さらにその問題に具体的に創造的に対応できるメタレベルの能力の養成」という、本専攻の目的を実質化したものと評価できる。



写真 5 附属臨床教育実践研究センター 心理教育相談室

2. 教育プログラムの成果について

(1) 教育プログラムの実施により成果が得られたか

● 主体的な大学院生の養成

前項においても述べたように、「研究開発コロキウム」は、大学院生が主体的に研究テーマを開発・設定し、そのテーマを授業として展開するというもので、学部生・大学院生の受講登録、授業参加、単位取得等、通常教員が行う授業と同じスタイルで行われてきた。また、研究成果を学会等に発表するなど、得られた成果の還元も積極的に行われた。まさに、学生みずからが手作りで学びの機会を作り上げたものである。このことで、学生の主体性が発揮される場が提供され、そこから実践に基づいた知の獲得が得られたと言え、これは大きな成果であった。

● 国際的な大学院生の養成

本研究科において、大学院生の国際化は大きな課題の一つであった。そこで、本プログラムでは、大学院生が海外でセミナーを受講したり、外国人講師による授業を受けたり、あるいは、国際学会で発表することを支援し、また外国雑誌への投稿を積極的に支援したりするなど、さまざまな取り組みを行った。その結果、学生の海外への興味は格段に増し、国際学会への発表が増えた。(臨床教育学専攻院生による実績は、平成 18 年度は、0 件。平成 19 年度 5 件。平成 20 年度 20 件。) こうした取り組みは、まだ端緒についたばかりであるが、今後も引き続きこうした体制を組むことで、さらに国際化をうながしていくことが望まれる。

● 「臨床の知」を創出する質的に高度な人材の養成

臨床の知はきわめて現代的な要請に相応した「知」であり、その創出への貢献をなしたことは、社会的な教育貢献であると考えられる。また、この「知」は、理論と実践との融合を基礎とするものであり、これはまた、「実践と研究の密接な連携のもとに、我が国における先端的な研究及び教育をつうじて有用な人材を育成し、学界並びに社会に貢献する高度な研究教育機関としての役割を果たすこと」という、本研究科の「目的」とも合致するものである。この「目的」を実質化するために、本プログラムはなにがしかの貢献をなしたものだと言える。

● 定量的なデータに現れにくい顕著な成果

大学院生より寄せられたコメントからは、本プログラムが大学院生の研究の発展に深く貢献するものであったことを、窺い知ることができる。大学院生に対する直接の研究支援に当たっては、研究科全体に向けた公募を行い、厳正な審査を経て支援に相応しい採択課題を決定した。こうしたプロセスを経て採択されることは、大学院生にとって、自ら研究の意義・価値を再確認することによって、現行の研究に対するモチベーションを高める貴重な機会となったようである。また、このように厳正な審査を経て採択され資金面での支援を得ることは、大学院生が、研究者として果たすべき責任や守るべき倫理を、改めて自覚することにつながった。各々の研究成果を社会に還元していくことに関わる責任感や、研究経費の正しい使用に関わる倫理観は、大学院教育を通じて涵養されるべき重要な資質である。さらに、研究科全体の教育改善を課題

とする本プログラムには、専攻・講座の壁を越えて様々な分野の大学院生が参加し、研究分野の垣根を越えた研究交流が促進された。大学院生にとってこのことは、教育学研究全体のなかで各々の研究が占めている位置を再確認すると同時に、異分野との対話のなかで各々の研究を発展させるための、貴重な機会となった。

3. 今後の教育プログラムの改善・充実のための方策と具体的な計画

(1) 実施状況・成果を踏まえた今後の課題が把握され、改善・充実のための方策や支援期間終了後の具体的な計画が示されているか

国際関係・アウトリーチ・カリキュラム・当プログラム全体という 4 つのセクションから、それぞれの代表者が毎年度末に自己点検・評価を実施し、各年度の反省と来年度に向けての方針が提示され、ホームページにおいて公表された。また、プログラムの内的な充実という点からは、平成 20 年度末には研究開発コロキウム代表者および学会発表支援を受けた学生らによる成果報告会（平成 21 年 2 月 19 日・於：京都大学百周年時計台記念館）を実施し、教員間で大学院生による取り組みを把握・共有し、さらに教員から大学院生へのフィードバックの場を設ける（平成 21 年 3 月 19 日・於：教育学部実習室）ことによって、大学院生の主体的な取り組みを奨励しつつ、教員からの適切なアドバイスを伝えるよう工夫した。プログラム全体としては、最終年度である平成 21 年度に外部評価者二名と当教育プログラム代表者らによる座談会（平成 21 年 8 月 25 日・於：教育学部会議室）が開催され、当教育プログラムの進捗状況と課題の把握、「臨床の知」についての議論が交わされた（外部評価者による評価および座談会の模様は最終報告書に掲載）。

また、毎年度末の自己点検・評価に加え、平成 21 年度末には三年間の活動を振り返る自己点検・評価が国際関係・アウトリーチ・カリキュラム・全体というそれぞれにおいて実施され、総合的に活動の反省と、今後の課題が把握されている。このように、本プログラムは、プログラム遂行と同時にたえずそれを反省的に振り返り、改善を目指してきた。しかし、本プログラムがめざすものは、けっして「完成」には到達できないものとも言え、今後の課題も多く残されている。

まず、国際関係では、国際企画によって国際的な場で発表の機会を得た大学院生が、さらにそこでの研究成果を論文としてまとめ、より広く国際的な舞台で発信すること、次にアウトリーチでは、学会発表支援によって発表者数は増加したものの、それぞれの発表内容の質を向上させるためにいかに適切な指導をしていくかという点、さらに、カリキュラム委員会においては、研究開発コロキウムとして大学院生が心理臨床学や教育学の領域だけではなく、多くの近接領域にまたがる研究を展開したが、それぞれのコロキウムでの成果を総合して「臨床の知」をさらに深めてゆくことが課題としてあげられよう。

当教育プログラムの取り組みによって大学院生が主体的に研究に取り組むこと、国際的な場面で積極的に自分自身の研究成果を発表すること、国内外の専門家との直接的な触れ合いによって「臨床の知」を、身をもって学ぶことができたと考えられ、「臨床の知」という一朝一夕には身に付かないものを教育プログラムとして実質化してゆくとき、こうした企画が長く継続されることの意義は疑う余地がないと言えるだろう。特に大学院生主体コロキウムにおいては、当教育プログラムが実施された三年間をかけて一つのテーマに継続して取り組んでいる大学院生も多く、それぞれにそのテーマを深めているところであり、当教育プログラムの支援が終了した後も、当研究科が現在獲得している他の外部資金によって支援を継続していくことが決定している。またアウトリーチ委員会によって実施されていたスーパーヴィジョン支援についても臨床心理学を学ぶ大学院生にとっては不可欠のものであり、来年度からも継続して支援を行なうことにしている。海外からの講師招聘や海外でのセミナーの開催は規模や頻度を縮小せざるを得ないが、当教育プログラムの三年間で国外の研究機関との交流は着実に深まっており、今後も持続してゆく方向でそれぞれの研究機関と話し合いが進められている。さらに、当教育プログラムにおいて実施された「臨床の知」研究会を通じては当研究科の教育科学と臨床教育学というそれぞれの専攻間での対話も生まれてきており、今後も引き続きこのような機会を定期的に設けていくつもりである。

4. 社会への情報提供

(1) 教育プログラムの内容、経過、成果等が大学のホームページ・刊行物・カンファレンスなどを通じて多様な方法により積極的に公表されたか

当教育プログラムの概要を説明するパンフレットを作成し関係機関に配布するとともに、**専用ホームページ** (<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/rgp/>) を開設して本プログラムの概要について公表し、講演会の企画や年度ごとの採択コロキアムの概要などについては随時ホームページの更新を行なった。またそれぞれの企画の公募もホームページに掲載し、適宜申請書類のダウンロードが可能な形を取ることによって、当研究科全体の教員および大学院生に広く当プログラムへの参加の機会を与えた。さらに、毎年度末には上記各委員会の自己評価・点検をホームページに掲載することによって、研究科内外へと積極的にプログラムの経過を公表した。

刊行物としては、**報告書 8 冊**と現在準備中の書籍「**臨床の知—臨床心理学と教育学からの問い**」(創元社にて刊行予定)が挙げられる。報告書に関しては「カリキュラム」委員会から**院生主体研究開発コロキアム報告書**、「国際」委員会から**国際企画報告書**をそれぞれ各年度末に作成し、「アウトリーチ」委員会からは 3 年間の活動を総合した**アウトリーチ活動報告書**を平成 21 年度末に作成、さらに当プログラム全体の 3 年間にわたる活動成果と大学院生の業績をまとめた**最終報告書**も平成 21 年度末に作成した。それらをすべて関係各機関および平成 19 年度に大学院教育改革支援プログラムに採択された各教育機関にも配布し、広く活動成果を公表した。それぞれの報告書においては活動の概要および企画教員からの説明に加え、参加した大学院生からの報告を積極的に掲載することによって、当研究科内外にその成果を生き生きと伝えられるよう工夫した。

平成 19 年度～平成 21 年度にかけて、当研究科附属臨床教育実践研究センターとの共催として現職教員を対象とした**リカレント教育講座**および市民を対象とした**公開講座**の各年度開講、平成 20 年度には「**病と臨床—病に生きる人間にみる臨床の知**」と題した**公開国際シンポジウム**(シンポジスト:アラン・ジェイコブソン(ジョスリン糖尿病センター)・河合俊雄(京都大学)・清水亜紀子(京都大学)／企画:皆藤章(京都大学)／平成 20 年 11 月 17 日(月)於:京都大学百周年時計台記念館)、平成 21 年度には「**鼎談—臨床の知への問い**」(登壇者:北山修(九州大学)・西平直(京都大学)・桑原知子(京都大学)／平成 21 年 10 月 29 日(木)／於:メルパルク京都)を開催し、「臨床の知」という当教育プログラムのテーマを多角的に検討する場を設けるとともに、広く参加を募ることによって、当教育プログラムの問題意識を対外的にも発信することを試みた。

5. 大学院教育へ果たした役割及び波及効果と大学による自主的・恒常的な展開

(1) 当該大学や今後の我が国の大学院教育へ果たした役割及び期待された波及効果が得られたか

本研究科では、①理論と実践の融合、②国際化、③若手研究者の養成、④研究/教育におけるフィールドの重視、を柱にした教育改革を進めてきた。本プログラムも、その目的に沿って組み立てられ展開されたものであり、このプログラムを実施することによって、錯綜した諸事象のなかから問題を構成し、その問題を創造的に乗り越えられるようなメタレベルの能力を持った学生を育てられることが期待された。

本プログラムにおいて目指されたメタレベルでの「臨床の知の創出」という観点は、本学研究科に留まるものではなく、他の大学院・研究科においても一般性をもったテーマであると考えられる。特に、実践や体験を重視する学問領域を持つ大学院・研究科においてはなおさらであろう。こうしたことが示されたのが以下の事例である。

広島大学大学院国際協力研究科の大学院教育改革プログラム拠点「グローバルインターンシップ推進拠点の形成(G. echo プログラム)」では、国際協力というフィールドにおいて学生が体験してくることをどのように「知」として学生に根付かせるかということが目的とされていた。その際に、本プログラムが提唱している「臨床の知」という概念がヒントとなるのではないかという発想のもとに両拠点での意見交換の場がもたれた。第 2 回 G. echo 年次総会においては、

一見曖昧で捉えがたい変化の本質に、触れることによってその良さを伸張する発想の転換を促す「臨床の知」に関心が寄せられ、現場での活動を「体験」レベルの留めることなく、より複合的かつ高次な知見へと昇華していくための大学院教育方法の新たな展開であるという認識で一致した。

また、本プログラムの成果を集約的に示している「研究開発コロキウム」という授業形式も他大学院への波及効果が期待されるものであった。

外部評価報告書において高く評価された「研究開発コロキウム」は、実践フィールド活用型の教育臨床において、今後、他の大学院においても導入が検討されるべき有意義なプログラムであるとの指摘を受けた。この波及に関しては、今後その実現に向けて努力を重ねたい。

さらに、本プログラムは、病院や学校、企業など社会と密接な関係を持ち、高度な「知」を創出するという意味において、「実践と研究の密接な連携のもと、我が国における先端的な研究及び教育を通じて有用な人材を育成し、学界並びに社会に貢献する高度な研究教育機関としての役割を果たす」という本学の使命を前進させるのに確かに貢献したといえる。また、文系大学院教育で困難視されていた共同研究、フィールド重視、国際交流などといった壁を突破する多様な試みによって、教育と研究、理論と実践のよい循環的關係を作り出しているといえよう。これらの成果は、学生という個々の人間の中に結実し、また彼らがかかわる社会の中に示されていくものだと考えられるが、それらを言葉という形にしたものとして、社会に発信するために、書籍「臨床の知－臨床心理学と教育人間学からの問い」の出版が予定されている。

(2) 当該教育プログラムの支援期間終了後の、大学による自主的・恒常的な展開のための措置が示されているか

本プログラムは、これまでの活動の展開によって、本研究科の教育と研究のうちに充分根付いており、その一部はカリキュラムに緊密に組み込まれて日常的活動の一部になっている。また、本プログラムは、その遂行とともにたえず反省的に振り返り改善を重ねていくサイクルとして組み立てられ、「完成」形態を固定的に想定しているものではない。

したがって、現在は、本プログラムと並行して進行してきたグローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際拠点」、および特別教育研究経費によるプログラム「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」の二つのプログラムに基点を移し、より活性化した形で新たなプログラム作りが実施されている。中でもボトムアッププログラムとして他大学院のモデルの位置づけとされた「研究開発プログラム」に関しては、今後も重点的な実施が確定している。なお、本プログラムは、大学院生を対象とした教育改革であった。学生の自主性を育てる国際化をめざすなどの点において、確かに成果は見られたものの、こうした教育アプローチは数年で成果を見いだすことは困難である。本プログラムの実施後痛感されたのは、より早い段階、すなわち学部教育の充実であった。そのため、平成 22 年度大学教育推進プログラムに申請を予定しているが、学部教育と相俟ってさらに大学院教育を充実させることを目指している。

今後の大学院教育は、運営費交付金等の学内の経費措置により、理論と実践が融合した新たな組織作りも視野にいれつつ、前項で示した 4 つの柱の重点的な改革を強化継続してゆく。

組織的な大学院教育改革推進プログラム委員会における評価

【総合評価】
<input type="checkbox"/> 目的は十分に達成された <input checked="" type="checkbox"/> 目的はほぼ達成された <input type="checkbox"/> 目的はある程度達成された <input type="checkbox"/> 目的はあまり達成されていない
〔実施（達成）状況に関するコメント〕 「京大型臨床の知を身につけさせる」という教育プログラムの目的に沿って、従来より組織化されるなど、教育の改善が行われ、人材養成は着実に行われていると評価できる。さらに、教育目的がどのように反映されているのか、定量的な指標が工夫されるとよい。 情報提供に関しては積極的に行われたと評価でき、支援期間終了後も「研究開発プログラム」等に関し、全学的なバックアップが決定されるなど、本プログラムを継続しようとする意志があり、波及効果についても今後の展開が望める。 今後の展開は博士後期課程の学位授与率の向上や高度な臨床能力が必要とされるキャリアパスの形成などに一層の配慮が求められる。
（優れた点） 海外のフィールドでの活動や海外学会発表などの促進により、国際的な活動が活発化した。
（改善を要する点） 学位授与率の向上に向けた具体的な方策や高度臨床能力が必要とされるキャリアパスの形成が求められる。